

サポート

ICT活用による教育活動の充実 ～コロナ禍における特別支援学校の取組～

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症対策の観点から、これまでどおりの教育活動を実施することが難しい1年でした。様々な制限や制約がありましたが、特別支援学校においては、これを前向きに捉え、学習活動の内容や方法を検討し、改善した学校が数多くありました。その中から、ICTの活用によって教育活動の充実を図った学校を2校紹介します。

支援学校天王みどり学園

密になる状況をつくらないように、月1回の全校集会を、学部ごとの会場をつないだオンライン集会として実施しています。分散開催になったことにより、大きな集団が苦手な児童生徒が参加しやすいというメリットもあるそうです。各会場をつないでクイズ大会を行うなど、オンラインに対応した内容を工夫しています。児童生徒は新たな集会の形を受け入れ、楽しんで参加しています。



スクリーンに映る他会場の様子

ゆり支援学校道川分教室

感染症対策のため、病棟を超えて場を共にする合同学習は実施できなくなりました。そこで、これまでも活用してきたタブレット型端末を日常的に用いて、他病棟の友だちと共に学ぶ活動を数多く設定しました。画面越しであっても、友だちを意識し、関わろうとすることができるよう、個々の見え方や聞こえ方に応じた提示を工夫するなど、ICT活用の要点を整理する取組にもつながっています。



画面越しの友だちに注目

感染症対策が求められる状況は、来年度も続きそうです。そのような中で、同時双方向型の配信や遠隔合同学習を可能にするICT機器は、教育活動を充実させる上で、非常に有効な手段です。今後も、各校における好事例を収集し、共有する機会を設けていきたいと考えています。

「e-AKITA ICT学び推進プラン事業」(令和2年度～令和4年度)により、今年度末までに全ての県立特別支援学校に、高速大容量の校内通信ネットワークや1人1台端末、入出力支援装置等のICT環境の整備を行います。来年度から、各校には、この環境を適切かつ計画的に活用した学習活動の充実により、障害のある児童生徒の情報活用能力の育成と、障害の状態や特性等に応じた学びの推進に取り組んでいただくこととなります。特別支援教育課としても、ICT活用推進モデル校の指定やICTに関する研修の実施等を通して、ICT活用によって、特別支援学校における教育活動が更に充実することを目指していきます。

インクルーシブの風

このコーナーでは、インクルーシブ教育システム（※）の推進の観点から、各校種等における特別支援教育に関する取組や交流及び共同学習の様子などを紹介していきます。

※インクルーシブ教育システム

人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするという目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み

小・中学校における特別支援教育の充実に向けて ～特別支援教育セミナーの実践から～

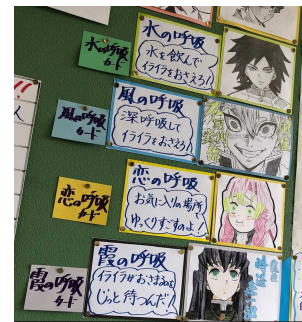
横手市の小学校、自閉症・情緒障害学級6年生3名の自立活動の指導を紹介します。

自分の思い通りにいかないときイライラしたり、友達にきつい（失礼な）言葉を言ったりしてしまい、友達と仲良くゲームをすることが難しい児童に、好きな人気アニメを題材に取り上げ、児童が自分の苦手さを解消する対策（技）を考えることで、自分の気持ちに折り合いを付けながら活動することをねらった指導です。

【題材名】ポッチャをしよう「イライラ（+失礼）鬼滅の刃大作戦」

【指導の工夫】

- ・「鬼滅の刃」のキャラクターが使う「〇〇の呼吸」〈※写真1〉と「イライラ（+失礼）を解消する技」を組み合わせ、自分でできそうな技を選択して活用できるようにした。
- ・ルールを書いて掲示したり、的からの距離が一目で分かる刀型のスケールを準備したりすることで、自分で勝敗等を判断できるようにした。
- ・児童のつぶやきや行動を板書して文字化し、その時の気持ちを確認したり、「笑顔でできていいね」など、場にふさわしい行動をその都度承認したりした。
- ・これまでの学習内容（児童が語った気持ちの言葉、場に応じた対応〈※写真2〉）等を壁面に掲示し、学習を振り返りながら自分への気づきが深まるように環境を工夫した。



※写真1 「〇〇の呼吸」

【成果】

- ・マイナスの感情を「鬼」として外在化し、技を使って倒すという設定にしたことにより、「負けそうになるとイライラする」「友達に失礼な言葉を言う」など自分のマイナス面を指摘されても受け入れることにつながった。
- ・負けそうになっても途中で止めたりすることなくゲームを続けることができた。友達の課題も意識し、ゲーム中に良い面を伝えたり励ましたりする様子が見られた。
- ・振り返りでは「イライラを忘れるくらい楽しかった」と話した。繰り返し学習をする中で、気持ちの折り合いの付け方や友達への関わり方を身に付け、ゲーム自体を楽しむことができていた。



※写真2 「場に応じた対応」

児童が自分の課題と前向きに向き合えるように、教師の考えを押しつけるのではなく、どんな行動がよいかを児童と一緒に考え、児童が判断することを大切にしている教師の姿勢を参考にしたい実践です。

（南教育事務所 指導主事 阿部 裕子）

～交流及び共同学習の充実に向けて～

栗田支援学校・横手支援学校の地域の人々との交流及び共同学習

「ランチくりた」の営業を通して

栗田支援学校高等部環境・福祉科では「ランチくりた」の営業を通して、接客や調理、清掃、材料の発注、会計処理など、実践的な学習活動を行っています。営業日には、地域の方々を中心に毎回30～40人程の方が来店されます。

今年度は、新型コロナウイルスの影響で営業開始は9月に入ってからでした。開始に当たっては、席数を減らして席にアクリル板を設置し、お客様には入店時の検温や手指消毒、お客様情報の記入など、



〈接客の様子〉どんな状況でも、明るい表情と声、そして相手の顔を見て、丁寧な言葉遣いで話すことを心掛けています。

お客様にとって、また生徒にとって安全・安心な状況づくりを工夫しました。生徒たちからは、「テーブルの消毒をこまめにしよう」「マスクをしているから声はいつもより大きく」「マスクで口元は見えないけど、笑顔で接客したい」等の意見が出されました。

営業日は、生徒も教師も緊張します。時間までに料理や準備は間に合うか、料理の味は大丈夫か、お客様に丁寧に接客できるか。その緊張感の中で、一人一人が活動に真剣に向き合っています。お客様からいただく厳しいご意見や、「こんなおいしい料理を作れるなんてすごいね」「接客がとても元気で、気持ちが良かった」などのうれしい言葉は、生徒たちの活動に向かう原動力となっています。まだまだ、新型コロナウイルスの影響が大きい状況ですが、地域の方々の期待と応援に応えるべく、接客や調理技術の向上を目指し、日々実践します。(栗田支援学校 高等部 環境・福祉科 教諭 加藤 秀幸)

「横手が舞台」～山内いものこの収穫体験～

本校では、特色ある教育活動の一環として「横手が舞台」を合い言葉に、地域資源を活用した学習活動を展開しています。

今年度、中学部では、地域の産業やそれに携わる人々の仕事の様子を知ること、生産に関わる基礎的な技術を身に付けることをねらいとし、地元農家の方と一緒に横手市の伝統野菜である「山内いものこ」の植え付け(6月)や収穫(10月)をしました。コロナ禍のため、小学部6年生の児童と中学部農耕班の生徒に人数を限定することになりましたが、児童生徒は活動をととても楽しみにしていました。収穫では、農家の方に見本を見せてもらいながら、その方法や注意点を説明してもらうことで、生徒は「いものこには親芋、子芋、孫芋があること」「連作障害を防ぐために、刈り取った茎や葉は畑に残さないこと」などを理解して活動に取り組みました。また、自然に仲間と力を合わせて地面からいものこを抜こうとするなど、進んで協力する姿勢が見られました。収穫後に自分たちが収穫したたくさんのいものこを目にし、児童生徒一人一人の表情に達成感が感じられました。収穫したいものこを横手市で開催された県種苗交換会で、高等部の生徒と協力して100袋程度販売できて、生徒たちはとても喜んでいました。



地元農家の方による収穫方法の説明

地域の方に学びながら山内いものこの栽培や収穫をする体験を通して、知識や技術を身に付けるだけでなく、地域への理解を深め、関心を高めるよい機会となりました。

(横手支援学校 中学部 教諭 佐々木 詠吏)